



「ひらほくに新聞」で検索!

★感謝で継続11年半★

http://www.hirahoku.com/

☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほくに) 山本直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

# 親皇紀元元年



日本の歴史の素朴な疑問、あなたは答えられますか? 2018年に感動講演DVDのご紹介をした赤塚高仁さんは現在、オンライン国史塾塾長等、講師としても活躍。この度、2月11日を迎える時期にぜひと思い、昨夏、赤塚さんが上梓された書籍、『はじめての日本国史 お父さん、日本のことを教えて!』をご紹介します。2002年、女子高生だった娘さんが、ホームステイ先のアメリカで、自国のことを何も答えられずに悲しい思いをしたことから生まれた日本国史書。ぜひとも多くの人に。

## 日本はいつ、誰が作ったのか

紀元前660年2月11日、神武天皇が建国したといわれている。アメリカで出版された中学1年生の歴史の教科書には、「日本のストーリー」として次のように書かれている。「太陽の女神(天照大御神)が孫の瓊瓊杵尊を地上に降ろして、国を統治するように命じた。この地上とは九州(宮崎県の高千穂)。そして瓊瓊杵尊のひ孫の神武天皇が日本の初代の統治者となった(日本の最も古い歴史書「古事記」のクライマックス『天孫降臨』を元に書かれている)。

戦前に使われていた小学校の教科書『初等科国史(復刻版)』によると、神武天皇は「東の方には、青山をめぐらした、国を治めるのによい土地がある」という。都をうつしてわるものをしづめ、大神の御心を

## 神武天皇は本当にいたか

神武天皇は実在したかどうかは不明。ご遺体は見つかっておらず、考古学的な証明もされていない。ただ、いなかたことも証明できない。戦後、古代の天皇に關しては、実在したかどうかやその在位期間について論争が続いている。

わかっているのは、「神武天皇が実在したかどうかはわからない」ということだけ。わからない以上、実在したかどうかよりも「神武天皇は最初の天皇として伝えられている」と日本人の共通認識としてとらえてはどうか。

## 神話は本当か

神話は事実ではないかもしれないが、「真実」が書かれている。

◎神話に込めた祖先の思いを読み取るのは子孫の仕事

「神話には、宇宙を創造するにあたっての、天の願いが込められている」ととらえたらどうか。その願いとは、「争いによって作る世界ではなく、みんなが仲良くする世界を作ろう」ということ。そして、代々、我々の先祖は、その神話に馳せられた思いをくんで日本を作ろうとしてきた。

祖先が神話に込めた思い

を「たとえ話」としてどう受け止めるかは子孫の仕事。受容力と想像力の問題。時代を超えて、「古事記」や「日本書紀」が伝えられてきているのには理由がある。自分たちの国の始まりを知るのには、自分の国を誇りに思う第一歩。知っていれば、海外の人に「日本のことを教えて」と聞かれたときに、「にほんの国の始まりは、こうだったんだよ」と胸を張って答えられる。

実は戦前や戦中は、日本の始まりについて「国史」として教科書に書いてあった。でも、戦後、GHQが、国史の授業の即時停止命令を出し、日本の子どもたちが自分の国の始まりについて知る機会がなくなった。

これからは、日本という国の始まりについて、自ら学ぶ機会があつてほしい。

「うしはく」は武力や権力で支配すること。

「しらす」は、「知る」の丁寧語で、愛や徳をもって治めること。

「古事記」には、日本建の物語、「出雲の国譲り」というエピソードがある。

天照大御神が、天の意に沿うような国を造ろうとしたら、すでに出雲を中心とする国ができており、大国主神

が治めていた。そこで天つ神(天照大御神などがいる高天原の神)を地上に送り込むが、2度にわたって失敗。国譲りはそれほどまでに困難なものだった。

そしてついに天上界から建御雷神と天鳥船神が遣わされた。建御雷神は、国をおさめていた大国主神に、「我々は、天照大御神と高御産巢日神の命によって、汝に問うために遣わされた。汝がうしはける櫃原中つ国は、我が御子の知らす国と任命された。汝の考えはいかげなものか」と尋ねた。ここで「うしはく」と「しらす」という言葉が出てくる。

つまり、「武力や権力で治めているあなたの国を、天照大御神の子孫が愛や徳で治めましよう」と尋ねたのだ。やがて大国主神(国つ神ともいう、土着の神)は、天つ神に国譲りをするが、それは「国つ神の信仰は認めてもらいたい。天つ神の宮よりも高い神殿を建ててくだささい」という条件付きだった。

天照大御神は、この大国主神の条件を受け入れる。そして、大国主神は出雲国の海岸近くに立派な神殿を建てた。それが出雲大社。その後、葦原中つ国は平定された(安らかになること)。

かつて、征服者が、支配する国に自らの価値観を押し付けなかったことがあつたらうか。多くの場合、宗教は捨てさせ、自分たちの神を拝むことを強制した。そして、従わなければ生きることができない。それが、「うしはく」世界。

私たちの先祖が作った神話の世界には、宗教戦争は出てこない。「しらす」世界は、話し合いながら平和に世の中を治めていった。歴史上、どの他国にもない『国譲り』。「国を譲る」という言葉も実に美しい。

日本人の

これからの役目は

それは、世界の灯明台になること。日本は世界で唯一の「知らす国」。相手を知って、愛や徳を持って治められている国ということ。「うしはく」国、武力や権力で支配する国とは異なる。知らす国のあり方、愛すること、知ること、そして相手に愛を持って接することを自分で体現し、ほかの国々のお手本となる。

権力で相手に向かっているかない日本のあり方を世界に見せていくことが、日本の役割である。

日本人は、「相手のために役立ちたい」という気持ちを持っている。そういう姿勢を大事にして伝えていくと、世界から争いがなくなっていくと思う。(終)

心温まる書籍紹介ブログ『人の心に灯をともし』より今月もご紹介します。

## 【フェイシャル・

## フィードバック効果】

心理学者、内藤誼人氏の心に響く言葉より…

私たちの感情というものは、自分がしている表情によって影響を受けます。楽しいことなど何もなくても、ニコニコしていれば、不思議に心も陽気になってきますし、眉間にシワを寄せて、不機嫌そうな顔をしていると、いつの間にか不機嫌になってきてしまします。これを「フェイシャル・フィードバック効果」と

いいます。私たちの脳みそは、自分がしている表情からのフィードバックを受けて、「笑顔なんだから、楽しいはずだ」と思い込みます。そして、ドーパミンなどの快樂物質を分泌し始めるのです。

私たちの脳みそは、表情にだまされてくれるのですね。「面倒くさいなあ」と思っ、そういう顔をしていたら、どうなるでしょう。私たちの脳みそは、面倒くさいという気持ちを引き出す乳酸などの物質を身体に分泌しはじめてしまいます。だから、余計に身体も疲れるのです。したがって、面倒くさい仕事に取り組むときには、もうこれ以

上ないというくらい満面の笑みを浮かべるのが正解です。「面白くもないのに、笑顔なんて作れませんか！」と思うかもしれませんが、作り笑いでいいのですよ。インチキでも笑顔を作ってあげれば、楽しい気分

にそのうちなつてきますからね。フェイシャル・フィードバック効果が起きるから大丈夫なんです。イリノイ大学のマヤ・タミールは、面白くもなんともないときに、1分間、笑顔を作らせるという実験をしたことがあります。両頬に力を入れてもらって、口角が上がるような顔（つまり笑顔）をとつてもらうと、なぜかポジティブな気持ち

が生まれたのです。また、タミールは、両眉に力を入れて、しかめっ面を作らせると、怒りっぽくなってしまうことも突き止めています。フェイシャル・フィードバック効果は、まことに強力な作用をもたらすと云えるでしょう。「まったく面倒くさい」と不愉快な顔をしてはいけません。そういう顔をしているから、なおさら面倒くさくなっていくのです。まずは自分の脳みそをだましてしまうためにも、とびっきり笑顔を作ってください。

「イヤだ、イヤだ」と思っても、どうせ逃げられないのですから、楽しくや

ったほうがいいに決まっています。そのためには、まず笑顔をすることが大切なのです。

退屈な作業でも、嬉々としてやっていると、それを見た周囲の人たちも、楽しい気分になってきます。ひよっとすると、「ちよっとその作業、僕にもやらせてよ」と言ってもらえることがあるかもしれません。

『トム・ソーヤーの冒険』(マーク・トウェイン)には、「ごきげんなペンキ塗り」という話があります。ポリーおばさんに罰として塀のペンキ塗りを命じられたトム・ソーヤーですが、鼻歌交じりに楽しそうにペンキ塗りをしていると、友達たちが代わりにやらせてくれとお願ひしてきて、トム・ソーヤーはそれを押しつけることができた、というお話です。

どうせイヤなことをするのなら、せめて楽しそうにやりましょう。そのほうが自分も楽しめますし、ほかの人も手伝ってくれるかもしれませぬよ。

『おもしろいほどやる気になる本』(明日香出版社)

同書には「できるだけ幸せな声を出す」ということも書いてありました。

『私たちの感情は、自分

にも言えるのです。怒りっぽい声を出していると、やっぱりだんだん心もムカムカしてきますし、できるだけ優しい声を出そうとしていると、優しい気分になってくるのです。

オランダにある阿姆斯特ダム大学のスカイラー・ホークは、幸せなときの声、悲しいときの声、怒っているときの声、不機嫌なときの声を出してもらう、という実験をしたことがあるのですが、それぞれの声によって、表情も変わること

を明らかにしています。怒りの声を出そうとすると、自然に表情も険しくなり、幸せな声を出そうとすると、柔らかな表情になることが多かったのです。

声と表情はとも運動しているようなのです。ということとはつまり、優しい声、幸せな声を出すように心がければ、それによって幸せな表情になり、幸せな表情を作っていれば、フェイシャル・フィードバック効果で、幸せな気分になるはず

です。面倒くさいことをしなければならぬときには、「ああ、自分はなんて幸せなんだろう」「ああ、私は仕事があつて、お金までもらえて幸せだ」。そんなことをわざと口にするのがいかに

もしませぬ。ウソでもいいので、そういうことを

口に出していると、本当に幸せな気分が生まれてくるでしょうから。』

「楽しいから笑うのではない、笑うから楽しいのだ」という、アメリカの哲学者・心理学者のウィリアム・ジェームズの有名な言葉がある。

人間には伝染しやすいものが三つあると、小林正観さんはいう。一つは、あくび。一つは、不機嫌。一つは、笑い。詩人のゲーテは、「人の最大の罪は不機嫌」と言った。不機嫌な人のまわりからは人は去っていく。不機嫌がうつるからだ。不機嫌な人は、不機嫌そうな声で話し、不機嫌そうな顔をしている。

「フェイシャル・フィードバック効果」を利用し、面倒なことを始める時も、そうでない時も、とびっきり笑顔で、楽しそうな声で話す人でありたい。(終)

コロナ禍での再度の非常事態宣言を受け、先月お届けしたご挨拶の裏面に「まず笑顔から」という筆文字と、シルバー川柳をお届けした。「すべて笑えて、冷蔵庫に貼りました」という有難いお言葉もいただいた。科学的にも立証されているという、まず最幸の『笑顔』で、そして『笑声』での「コミュニケーション」を。

自分は昭和37年、新潟・魚沼の山間部、いわゆる豪雪地帯に生まれた。温暖化が進み、暖冬が多くなってきたなかで、この冬、北陸地方他で、大きな幹線道路でも長時間の立ち往生が起きるほどの大雪が降った。故郷を離れ、大雪で懐かしく思い起こされるのは、小学生の頃。当時は、毎年3〜4回の雪が普通に降り、スキーを履いて学校へ行ったことも。家の前は毎朝早く(多い日は日中も)玄関からほり上げて「かんじき」で隣の家との決まった場所まで「道付け」。県道も車は通れなくなり、大型圧雪車が道付け。

## 古里の雪

その頃、養豚もしていた。一度に10匹以上生まれたなかで動けない未熟児がいて、家の電気こたつに小さな段ボールに入れ、油差しでミルクをあげて育てたこともあった。そして、真冬でも豚の出荷があり、大きな長い檻付きのソリに無理やり乗せて、父親が前で引き、自分が後ろから押して、農協までの2キロの道を往復した。あの当時、果たしてその豚がどうなっていたのか分かっていなかったかもしれない。

一晩に1坪の積雪は当たり前。降り続くと一番大変なのは雪下ろし。かなり大

きな家だった他に、豚舎と蔵。一週間もしないで来るその重労働。父は、農業と兼業で冬以外は、土木作業の仕事に出ていたが、無事に大雪の冬を越すことが雪国の冬の大仕事だった。高卒で自分が上京した頃は家だけになつていたが、何歳まであの重労働を一人でやっていたのだろうか。

その父は、2014年4月他界。その年も豪雪で4月半ばでも無人の実家の庭は2階まで届くほどの(雪下ろしでできた)雪の山があつたが、実家に灯明・香典を届けに来る人たちのために除雪してあつた。斎場で無事に告別式が終わり、そして部落に伝わる『野辺送り』という風習で火葬場に行く前に実家に寄った。そこで見た光景は今でも忘れられない。家から出られない人以外、寒い中、部落のほとんどの人が集まったという程の見送りの人垣。参列者から「村の名士だった」との言葉を聞き、涙が止まらなかった。

長年、区長等の役員を歴任後、民生委員を二十数年。晩年は語り部として「記念誌」づくりに没頭した父。ひたすら人の為に尽くした人生。その生き方を「恩送り」することが、有難く

自らの使命と実感する。父の戒名にある「徳」を積み、世を「照」らすために。